
電波（ルナティック）な夜にこんばんわ

闇夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルナティック

電波な夜にこんばんわ

【Nコード】

N2177L

【作者名】

闇夜

【あらすじ】

ルナティック

電波な夜に魔女の帽子をかぶった少女に町を案内される。グロテスクな住人、残酷な風景。ルナティックな夜は世界の本当の姿を映し出す。

何の予定の無いゴールデンウィーク、これといって何かするわけでもなく怠惰にすごす日々が続いている。

さらに、ギャンブルにおぼれ三万円も負けるといふ精神的疲労やまともな食べ物を食べていないセイだろうか。

今日はとても眠くまだ太陽が出ているうちに眠りについた。

目が覚めたときには完全に日が沈んでいて深夜を迎えようとする時間だった。

気晴らしにボロボロの靴を履き夜の町へと繰り出してみた。

目的もなく自然に駅のほうに足は向く。昼の騒音とは裏腹にとっても静かで息づくものが存在しないようであった。

しばらく直進していくと後ろから人が歩く気配がした。

なんとなく怖くてコツコツという足音を聞きながら、絶対に抜かれないように少し早足で歩いた。

駅に近づくと人も増えてきた。

駐車パークという場所で若い男達がなにやらボールで遊んでいるのを横目に駅のまん前まできてぐるりと旋回し、今と違う道を通って家に帰ろうと思った。

自動販売機の光がやけにぎらぎらと輝いていた。

定食屋が並ぶ道をひたすらにあるいているとパトカーが止まっているのを目にした。

なぜかドキドキと不安が胸を過ぎるなか、やましいことはなにも無いのに悟られないようにと無表情を装ってパトカーを通りすぎる。

マンション近くの人通りの少ない場所に来ると夜の静けさが心地よく感じられるようになった。

新しくできたマンションはとても綺麗で遥か昔に止まったホテルを思わせるような楽しい違和感があった。

マンションの近くには会社のグラウンドがあり休日はスポーツ少年達のせわしない声が聞こえてくる。

それも夜ではだだっ広い土地が広がっているだけで不思議な感覚を味わった。

その前には裁判所がありここで凶悪な犯罪者が裁かれているのだと考えると少し背筋が凍るような気がする。

帰りのマンションの前、そこには鉄棒のようなものに時計が置いてあるよく公園などで見かける時計が置いてある。

なんとなくそれを見上げた瞬間、針が動いて零時を指し示した。

そのとき目の前だけ強風が吹き、瞬きをして目を開けたときには魔女のような尖がり帽子をかぶった小さな女の子が直ぐ目の前。鼻と

鼻が当たりそうな距離にいた。

魔女の帽子に黒いマント、整った顔立ちだがまだ幼さを残す小学生
中学年ぐらいの子だった。

この時間にこの格好、絶対にやばい。

そう思い仰け反り回れ右して逃げようとした。

するとその少女に腕をつかまれて全身から油汗のようなものが噴出
すのを感じた。

ルナティック
「電波な夜にこんばんわ。」

少女はそういうとにっこりと笑い、まるで彼女のように腕に寄り付
いてきた。

「今日はあたしが貴方にルナの夜を案内してあげる。」

耳元でそう囁くとまた駅のほうへと足を進める。今度は二人分の足
音で。

今までと同じ建物で同じ風景なのにどこか違うそんな違和感がある。
空気が重く月の輝きがほんのりと赤い。謎の少女にいわれるがまま
一緒に歩いた。

しばらくして駅に向かう一本道でシャキン、シャキンという音が後
ろからしてきた。

後ろを振り返ってみると庭師がよくもっているような大きな鋏を開
閉させている大男がすぐ後ろにいた。

顔はまるで絵の具が溶けたようにぼやけていてただひたすら鋏を開
けては閉じを繰り返す。

「あれは首切り人だよ。首をあの鋏で切るのが大好きなんだよ。」

直ぐ脇の少女は陽気に説明してくれた。

「光に当たらないようにしてね。影が出来てあの人に当たると首を
もっていかれるから」

電灯の直ぐ目の前でそんなことを言われ、何とか足を止めることに
成功した。

それからシャキンシャキンという音と共に光を避けてしばらくある
くと、いつの間にか首切り人はいなくなっていた。

駅の近くに行くにつれ変な妖怪のようなものや、人間がぐちゃぐち
やになったような生物が増え始めた。

駐車パークがあつたここでは爬虫類人間みたいなものが生首でキャ
ッチボールをしていた。

投げるごとに切れた首元から血が飛び散りまわりに痕跡をのこす。

その血が謎の少女のマントに少しつき、「最悪」と少女は悪態を
ついていた。

自動販売機では人間の腎臓や肝臓、心臓などが売られていた。

それをみてもなぜか不思議だとは思わなかった。この夜になれてしまった自分に少し恐怖を懷いた。

また旋回して違う道に向かうとパトカーが合った場所に墓が一つ置いてあった。

墓標には偽りの正義と書いてあった。

「いいことしても死んだらなにも意味ないのにね」

謎の少女は誰にいうとでもなくぼんやりと呟いた。

しばらくするとグラウンドのところに着いた。

赤い月の光がテラスグラウンドで小さな宇宙人がたくさん集まっていた。

真ん中には電光掲示板のようなものがあり見たときには十秒から九、八と数字が減っていつている。

ゼロになった瞬間、百ぐらいはいた小さな宇宙人は全員一斉に弾けとび、腕やら足やらが当たり一面に広がった。

するとどこからかまた同じ小さな宇宙人が出てきて、散乱している手や足を食べ始めたのだ。

「あれは宇宙人じゃなくて餓鬼よ。可愛そうに……いろいろなものに飢えているのね。」

伏し目がちに少女はいうと歩くペースが少し落ちた。

なんだか歳相応の子供に思えていたたまれない気持ちになった。

裁判所の前では大きな一本の木が植えてありそこからりんごの実がなるように、首を吊った人達がたくさん実っていた。

「これは罪びとの木よ。罪を犯して死刑にされた人の数だけ死体があるのよ。でもほらあそこを見て！」

そういつて少女が指差したのは、首を吊っているのに生きていて涙を流しながらもがいている人だった。

「この木では無罪なのに吊るされた人は生き続けるの。誰かが不正を正さない限りあの人は救われないわ。」

裁判所を通りすぎやっとな自分のマンションの前までやってきた。

結局少女はずっと腕にくっついたままでマンションに着いた瞬間やっとはなしてくれた。

「どうだった？ルナティックの夜は。この世界なんて大体が偽り本当の姿は電波な夜にしかめられないんだよ。それじゃあ、またいつかねっ！」

少女はそういつて歩いてどこかへいつてしまった。

一人取残された。

いったいいつ目覚めるのだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2177/>

電波（ルナティック）な夜にこんばんわ

2010年10月9日05時57分発行